

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

古代以前の河内 ー三世紀を中心に、「モノ」とのかかわりに着目してー

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2020-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 敏, ISHIGAMI, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/899">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/899</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 古代以前の河内

— 三世紀を中心に、「モノ」とのかかわりに着目して —

- 1、はじめに
- 2、纏向遺跡出土銅鐸飾耳片について
  - (1) 唐古・鍵のこと
  - (2) 「円」について
  - (3) 銅鐸の破壊と水路
- 3、讃岐・阿波系土器と河内
  - (1) 河内に集中する讃岐・阿波系土器の出土例
  - (2) 河内の山と川
- 4、玉造りの人々
  - (1) 海彼からの影響
  - (2) 「玉造」（河内玉造）について
- 5、玉と櫛について
  - (1) 玉櫛明神
  - (2) 櫛玉饒速日命
- 6、おわりに—今後の展望

石上敏

## 1、はじめに

本稿のタイトルを「古代以前の河内」とし、副題に「三世紀を中心に」と付した。三世紀といえは古墳時代（出現期・早期～前期）に当たるが、河内という名称の由来となった地域に古墳は多くない。むしろ、古墳がないところが河内の河内たるゆえんであると考えられる。<sup>①</sup>

また、周知の通り、日本史における「古代」という時代区分には大きな揺れがあり、現在に至るまで統一的な定義がなされていない。近年、「日本に古代はあったのか」という本が書かれているほどである。その一方で、「中世」といえば鎌倉・室町時代（さらに詳細に分ければ、鎌倉・建武の新政・南北朝・室町・戦国・安土桃山）という時代区分は、よほどのことがない限り揺るがないし、さらに次の「近世」は江戸時代、「近代」は明治維新以降であることも、おおかた異論のないところである。

「人間の（文化の）歴史」を記述するに当たって、その最初が「旧石器時代」であることは（「新石器時代」と合わせて「石器時代」とする場合も含め）、日本史・世界史を通じて、およそ共通している。そして、その次の時代が、日本の場合には「縄文時代」であり、さらに「弥生時代」が続くということも、ほぼ異論がない。<sup>②</sup>その後、「古墳時代」「飛鳥時代」「奈良時代」「平安時代」と続くが、文化史では、たとえば奈良時代を「白鳳時代」と「天平時代」に分ける場合もある。さらに文学の歴史（文学史）には独特の時代区分があつて、奈良時代以降の古代を「上代」と呼んだり、奈良時代を「古代前期」、平安時代を「古代後期」と呼び分けたり、あるいは平安時代を「中古」と呼んだりもする。日本文学の発祥が奈良時代以降（とされている）であり、文学史が文化史の一部である以上、このように独自の呼び方がなされるのは、ある意味自然なことであつた。

本稿では、以上のような「古代」の揺れには必要以上に拘泥せず、古墳という葬送儀礼・祭祀形態が日本各地で展開する三世紀を中心に、旧石器時代から奈良時代まで広く時間軸をとりながら河内を観察し、人間がつくる「モノ」<sup>③</sup>、むしろ、それらを「つくること」「こわすこと」（捨てること）に着目しつつ、河内の風土について、すなわち人間が住み着いて暮らす場所（地域）としての河内について考察して行きたい。<sup>④</sup>

右のような時間軸の問題の一方で、河内をどの範囲と定めるかという空間軸の問題も存在する。かつて、摂津・和泉を含んで「凡河内」「大河内」と呼ばれた頃の河内は、ほぼ現在の大阪府（兵庫県西南部を加える）に匹敵する地域だったと考えられる。また、律令体制以降にも、河内は和泉を含んでおり、八世紀の間に和泉国を分離した。また河内は、難波（なにわ摂津）との関わりの中で変遷してきた。そのような経緯はもちろん無視できないが、本稿では生駒山の西側にひろがる平野部のうち、淀川から和泉山地まで、中でも淀川から羽曳野丘陵までの旧大和川

流域を主な対象として「河内」と呼ぶことを先ず記しておきたい。

## 2、纏向遺跡出土銅鐸飾耳片について

### (1) 唐古・鍵のこと

「唐古・鍵」という地域に私が関心を抱いたのは、河内研究の一環として「八尾」という地名を調査する過程においてである。日本全国の「八尾」、あるいはそれに類する「七尾」などの地域を考察する過程で、河内平野だけではなく奈良盆地にも、大和川の支流(複数の川筋)によって蜘蛛の巣状に形成された地形の名称として八尾があることを知った。その大和の八尾は、一本の川を隔てて唐古・鍵と隣接していたのである。それまでも唐古・鍵という地名は知っていたし、そこが近年、弥生時代最古の大型建物を擁する大環濠集落の発掘現場として注目を集めているという程度の知識は持ち合わせていた。しかし、そこが大和川の上流に当たり、すぐ近辺に八尾という地名があることまでは知らなかった。

そして、唐古・鍵の上流には、邪馬台国の候補地としてやはり近年注目されている纏向(巻向)があつた。たとえば『邪馬台国と纏向遺跡』には、橋本輝彦氏の発言として次のような記述がある。

「纏向遺跡のすぐ西南側には大和川の上流域にあたる初瀬川という川が流れています。ここでは大阪湾から大和川を経由して桜井まで物資を運ぶ水運が古くから発達していたとのこと(中略) 近隣に比較的大きな河川があり、陸路だけではなく水路も非常に交通の便のいい場所ということですよ」(二六頁)。

纏向も、唐古・鍵も、いずれも「大和川の上流域にあたる初瀬川」のほとりに立地する。さらに、ここで注意されるのは、「大阪湾から大和川を経由して桜井まで物資を運ぶ水運が古くから発達していた」という部分である。そのような水路は、何もない平地から開鑿されたわけではなく、天然の川筋を利用して通されたものと考えられる。そして、水路の維持・管理を含め、すでにそのノウハウを有していた人々の力が関与したと考えるべきであろう。

本稿で古墳時代の河内を取り上げるに当たり、ここではその前期に当たる三世紀を中心に、六世紀末からの飛鳥時代(王朝時代)、八世紀

の奈良時代に至るまでの大和川の上流（大和盆地）を観察し、大和盆地の動向が大和川の下流、すなわち河内にどのような影響を与えたのか、また、これら二つの地域がどのような関わりを結んでいたのかを考察することから始めたい。<sup>9)</sup>

## (2) 「E」 200cm

まずは纏向の水路を考える上で、『邪馬台国と纏向遺跡』に載る、この地から出土したひとつの遺物に着目する。それは石田博信編『纏向』から転載した図版で、「銅鐸飾耳片」と名づけられている。すなわち、その名称から分かる通り、銅鐸の縁部に付属した耳型の飾り（円形部径四・二cm）である。

この地域の考古学的成果は、古墳というひとつの名称で呼ばれているものが、とりわけ前方後円墳という形（定形）に至るまで、ほとんど定形すらないものとしてつくられていたことを示唆している。その一方で、すでに「円形」と「方形」というフレーム（枠組み）またはフォーム（定形）があり、それらが組み合わされ、あるいは融合してゆく過程が古墳の形態の変遷であるということも、おぼろげながら理解できる。ただし、前方後円墳の出現以降も、特に円墳は消滅することなく、前方後円墳と時代的に併行して続いてゆく（『邪馬台国と纏向遺跡』一一六頁）。さらにその一方で、「前方後円墳出現に前後して住居形態が円形→方形に移り変わる」（同一一七頁）という、古墳と住居との連動という実に興味深い現象がある。言い換えれば、古墳を墳墓としてのみ考えるのではなく、当時の人々の生活全体の中で考える必要があるということになる。<sup>10)</sup>

そのように、ある時期、そしてある地域の人々が特別に執着した「円」（角のない形）を脱して、生活の場を中心に「方」（角をもつ形）へと変えてゆく力が、どこから発生してきたのか。これもまた住居だけではなく、生活全般の中で考えるべきことなのであろう。住宅の材質から、建築地（地形・地質等）が変化・変遷した可能性、さらには祭祀的な側面や技術面の革新から嗜好・流行に至るまで、あらゆる可能性が検討されてよい。そう考えたとき、「前方後円墳の出現」と「住居形態の変化」とが相前後して起こっていることは、やはり見過ごすことができない。この地域では、「前方後円墳の出現」とは、別の言い方をすれば円墳から前方後円墳への移行であり、「円」（円形部）に「方」（方形部）が加わったということにほかなるまい。ただし、その一方で、三世紀以降の前方後円墳を通じて、原則的に円墳部が埋葬部の役割を果たし続けたこともまた重要な事実である。<sup>11)</sup>

「方」の部分は、弥生墳丘墓の突出部が原型であると言われている。本来は死者を祀る祭壇として発生し発達したとする説や、葬列が後円

部に至るための墓道であったと解釈する説などがあり、それらの「用」(用途・役割)と「体」(形態)が相俟って、次第に独特の形状を成したと考えられている。つまり、住居形態と墳墓形態(機能)との間に強い関わりがあると仮定した場合の話であるが、それまで円形であったものが方形に変わる(新しく選ばれる)ということは、まさに革命的な変化であったと称すべきことが理解できる。ただし、堅穴式住居の時代にも方形(高床式)建物はすでに存在していたわけであり、いわば、それら高床式の方形建物(その機能)を住居に転用したという考え方も不可能ではない。そう考えるならば、円形の堅穴式住居よりも、方形の高床式住居の居住性が高いことは、おおかたにおいて確実で、その居住性の高さが認められるようになったという見方も可能である<sup>13)</sup>。

そのような変化・変遷の背景にあったと考えられるのは、ひとつには気候変化という自然環境であり、ひとつには防衛の必要性が高まったという社会事情である。とりわけ後者は、権力の集中を可能にする蓄財の側面と大きく関連している。他部族(外部の集団)との抗争の頻度や緊張度が高まるにつれて、おのずから警戒と防衛の必要性和意識が高まり、できるだけ高い場所で生活(特に就寝)したいと考えることは、実に自然な経緯であり選択であろう。とはいえ、方形住居が必ずしも高床式とは限らず、堅穴式のものも報告されていることから、居住者数の増加という事情もまた考えられる。つまり、生産性の向上による人口増加と家族集団の自然増、あるいは居住空間の増大欲求、もしくは家族制度の変化に応じたという可能性である。

弥生時代前期には東日本と西日本で大きく異なるが、後期には全体的に同形式(堅穴式)に収斂する傾向が報告されている。また、二世紀末頃に東海では方形墓、近畿では円形墓への明確な分離が進んだ中で、弥生時代後期・終末期から古墳時代早期にかけて(二〜三世紀頃)、隅の丸い方形の堅穴式住居(隅丸方形・長方形住居)が現われてくるという報告もなされている<sup>14)</sup>。方形の住居(部屋)は、おおかたにして円形の住居(部屋)より広い面積を確保でき、天井までの距離も空間(体積)も大きくなる。円形住居とは、現代の用語でいえば住環境と生活の質(QOL)が明らかに異なる。

それでは、住居に方形の空間を取り入れる趨勢と、墳墓(円墳)に方形の空間を設けることの、どちらが先行したのだろうか。二世紀から三世紀にかけて住居の方形化がすでに進行していることから、住居・居住空間が方形へと移行してゆく経緯が先行し、当初は円墳であった墳墓に方形を付加してゆく過程に、何らかの影響や関与をもたらしたものと考えられる。このことは、古墳が死後の住空間であったという考え方も整合性を持ち、死後の住空間・住環境をより快適にしてゆく目的で変化を遂げたという考え方を支える。ただし、最古の古墳とも言われる楯築墳丘墓は、すでに円丘部の両側に方形突出部を持ち、円形と方形の複合体として出現した。また、東海・関東では前方後方形墳丘墓

の流れを汲んで前方後方墳が造られ続けた。<sup>15</sup>方型周溝墓と円型周溝墓、方墳と円墳の分布にすでに存した東日本の「方」（角）志向（嗜好）と西日本の「円」（丸）志向の並立は根づよく、おそらく現代の角餅・丸餅にまで及んでいる。

実際の住居・住環境においてまさしくそうであるように、改変・改善には多かれ少なかれ経済的な側面が付随する。そして住居以上に余剰生産とそれにもとづく労働力なくしては、墳墓の構築、とりわけ巨大古墳の築造は不可能であっただろう。およそ三世紀中頃に出現した古墳が、その後三〜四世紀に拡大化し、五世紀にピークを迎えたあと、七世紀に向けて縮小してゆくのは、古墳によって威信を示す必要がなくなっただという理由もさることながら、経済的に巨大古墳の造営が困難になり、ついには不可能になったからと考えることが最も合理的である。<sup>16</sup>

### (3) 銅鐸の破壊と水路

以上のように、古墳と住居の相関的変遷を踏まえたうえで、再び「銅鐸飾耳片」へと戻りたい。この破片の検出されたのが、飛鳥時代の川の中であつたということは、単なる（銅鐸の）破壊のあとの廃棄とは、また別の可能性を考えさせる。<sup>17</sup>そもそも『纏向』に載る写真は、この「耳片」が全くの破片（破壊によるゴミ）であつたかどうかという問いかけを誘発する。すなわち、形態としての「円」を確保しつつ、注意深く破片化した可能性が考えられるのである。『纏向』には、「ここ数年の間に（中略）銅鐸のかけらと、壊した銅鐸をほかの何かに作るための、ふいごの羽口などの道具と一緒に出てきています」（『邪馬台国と纏向遺跡』五九頁）という石野博信氏の指摘があり、再利用の可能性を示唆する出土例のあつたことが確認されている。この考察に基づくのであれば、この破片も完全なスクラップと考えるべきであつた。信仰や祭祀、宗教的な畏怖や敬意の結果とは全く別のもの、端的に言って廃棄物以外の何ものでもない。いわば、祭祀の供え物とした花や供物を、枯れたから、腐ったからという理由でゴミ箱に捨てるのと同じ理屈である。その場合には、ただ偶然に円形を残したまま破壊され、廃棄された欠片が、たまたま出土したことになる。

しかし、銅鐸は花や供物ではない。ある期間、継続して祭祀に用いたはずの祭具である。よって捨てたものであつたにせよ、その「捨て方」には、ある種の敬意が含まれていた可能性を考えることもできる。先に弥生時代の生活形態と古墳との関わりについて考察したが、いわば「モノの葬送」について考えを及ぼすことは無意味であろうか。<sup>18</sup>石野氏は、「三輪山の南側の脇本遺跡からも銅鐸のかけらが出てきました。奈良盆地の東南部で銅鐸をたたき壊す、それまでさんざんお世話になってきたカミを祭る用具を壊すという出来事が、二世紀の終わりごろに起こっています」と述べ、「そして、そのときに同時に登場するのが纏向です。纏向に來た人は、よっぽど厳しい人間ではないか」（五九頁）

と加えている。銅鐸の破壊と纏向の成立が同じ人々によってなされたか否かは未だ立証されておらず、既述のように銅鐸の破壊であったか否かも厳密には確定しがたい。よって石野氏の発言には一定の留保が必要だが、二世紀末に「奈良盆地の東南部」で銅鐸が破片へと解体された事実は動かない。何らかの目的があつて銅鐸が多くの部分(破片)に分割され、そして捨てられた。もしくは再利用された。ただし、それでもなお土に埋める行為、まして川に流すという行為が介在するのであれば、祭祀的な、また宗教的な意味合いが込められていた可能性を捨てきれない<sup>19)</sup>。

三輪山付近の旧河道は実に数多く、そして、いずれもが川幅一〇〇メートル級の大河として流れていた(まさに、河内を思わせる環境である)。その意味で、「銅鐸のかけらが飛鳥時代の川の中から出てきた」ということが、全くの偶然である確率も高い。しかし、当時の人々にとつての河川の意味を考慮に入れるならば、私には、あえて川に沈めたという可能性のほうが高いと思われるのである<sup>20)</sup>。現在、この地域の河川の多くは川幅数メートル、大きな川でも幅一〇メートルから数十メートル程度に過ぎない。そして、川幅一〇メートルに及ぶ河川は、安全対策が徹底されて、高い護岸によって守られている。そこから何かが出てくるというのは、投げ入れたと考えてまず間違いない。ただし、古代の纏向のように、一辺数キロに及ぶ範囲内に川幅数十メートルから一〇〇メートルを超える河川が何本も流れていたのであれば、あえて川に捨てる、あるいは川に流すという意識すらなく、たまたま川に落ち、流された破片も多数あつたと想像される。さらに、これらの川では氾濫・洪水が繰り返されたであろうことを考えるならば、保管していたものや土に埋めていたものまでが川底から見つかる可能性も十分に考えられるだろう。

つまり、この破片がどのような契機で破片になったか、そして、どのような過程を経て旧河道の川底に沈んだのかということの、いわばすべてが未確定である。もちろん、数多くの発掘経験があり、考古学の見識のある方々の声に、先ず耳を傾けるべきことは当然であるが、それでもなお私には「わからないこと」が多すぎる。言い換えれば、この欠片の来歴には多くの可能性が残されている。



## 3、讃岐・阿波系土器と河内

## (1) 河内に集中する讃岐・阿波系土器の出土例

内陸部の大和から、いったん河内へと視点を移動させたい。出土品について考えるため、同時代（三世紀）の河内と讃岐・阿波との関わりについて、『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』<sup>(2)</sup>に沿う形で、しばらく見て行きたい。

同書に収められた山田隆一氏「大阪府の讃岐・阿波系土器と備讃系製塩土器」の「図5 讃岐・阿波系土器を出土した遺跡分布」（二二五頁）からは、その極端な中河内への集中に目を奪われる。二〇〇六年一〇月のシンポジウムの資料なので、やや古いものだが、基本的な数字は十三年後の現在も訂正の要はない。古代には、上町が大阪の中心であったという論評をしばしば目にするが、上町には讃岐・阿波系土器の出土がなく、言い換えれば人の定住の気配がほとんどない。上町半島（現在のの上町台地）の西、すなわち現在の大阪市の西半分が海の中にあっただけでなく、他に居住に好適な場所があったという理由が大きいだろう。また、ここでは讃岐・阿波系土器の使用に限って見ているという限定条件もある。しかし、それにしても上町と生駒山麓との集住度は、従来考えられていたよりもずっと後者に偏重していた。

すなわち、出土土器による讃岐や阿波との交通・交易、あるいは移住という動態の推定から見えてくるものは、河内が舟を操る技術に長けた人々と関わりの深い地域であったという事実である。それに対して、いくら都市化して発掘の機会が限られているという条件があっても、讃岐・阿波系土器の出土例が上町半島一帯（特に沿岸部）に皆無であることは注目される。また、上町半島の西岸（大阪湾岸）を南へと下っても、泉州地域からの出土例が少ないことも見過ごせない。石津川（支流を含む）に三例、大津川に二例、近木川に一例といった程度で、その他を含めても泉州沿岸一帯には一〇例が見受けられるのみである。<sup>(2)</sup>ここで再び河内へと目を転ずるならば、古大和川一帯における出土例の多さに目を見張る。この数値が、河内湖の時代に河内平野に住んだ人々の密度を、どの程度正確に反映しているかは必ずしも明確ではないにせよ、三世紀頃、現在の大阪府域に住んだ人々の過半は、河内湖南の古大和川沿いに住んだと考えることができる。<sup>(2)</sup>

その一方で、河内湖の対岸（北岸）に古淀川が形成する三角洲上には、五点以上の出土数という密度をもった崇禪寺遺跡以外、出土例は皆無であり、この対比も注目される。崇禪寺遺跡を除いて淀川流域からの出土例はなく、北河内（淀川以南）では支流のかなり上流部に藤坂東遺跡が孤立的に存在する。摂津側では桧尾川沿いに一例、芥川沿いに二例（内一例は五点以上の出土）、その他には安威川と茨木川沿いに各一例の出土例を認めるのみである。むしろ旧淀川河口部の三角洲の北側から猪名川にかけて、一か所の遺跡が集中し、中でも垂水南・五反

島・利倉西・穂積の四遺跡からは五点以上の出土がある。中河内以外で最大の密度を示す地域ではあるが、それでも中河内に比すれば、数分の一程度の密度に過ぎない。<sup>25)</sup>

このような南北の偏りには、南に根を持ち、北に向かつて伸びた上町台地(半島)の存在が大きく関与していたものと考えられる。この半島あるゆえに、河内湖の南では古大和川によって運ばれた土砂の陸地化が進み、せいぜい上町半島由来の砂洲によって護られた北側では、古淀川が運ぶ土砂は長い間洲のままで陸地化が遅れた。<sup>26)</sup> 上記の出土密度の差異は、そのような事情の反映でもあつたはずである。すなわち三世紀頃の河内には、讃岐(現在の香川県東部)や阿波(同徳島県)と結んだ交易圏を有する人々がおり、その交易は活発な舟運(水運)によって支えられていたと推定される。のちの時代(奈良時代)になるが、遣唐使の小野妹子一行が答礼使の裴世清を伴って唐から戻ってきた際<sup>27)</sup>に、都(平城京)へは難波から舟で旧大和川を遡り、河内と大和の国境(亀ノ瀬峡谷)を越えて海石榴市<sup>つばいち</sup>まで進んだ舟運(河道)、少なくともその原型が、すでに三世紀の時点で河内と大和を結んでいたとしても不思議ではない。問題は、同じ時代の大和では、讃岐や阿波ではなく、尾張などの東方や近江などの北方との交易の形跡が色濃いことであるが、そのことが舟運(河川交通)の脆弱さを示すわけではなく、河内と大和との交流の稀疎を示すことにもならない。近隣の交易先であるからこそ、日頃用いている土器を大量に持って移動しない可能性が考えられるからである。

昨今は、かつてのように河内と大和ではなく、それ以外の地域とのつながりの濃さを示す知見が多く報告されている。<sup>28)</sup> そして、そのことが相対的に大和と河内のつながりを打ち消すように作用している。しかし、やはり、まず大和と河内という大きなブロックがあり、それらが生駒・葛城・金剛山系を介して緊密に交流することで、日本列島の経済的中枢をなしていたことは疑いえないであろう。

## (2) 河内の山と川

河内の風土を考えると、私はまず河川(旧大和川水系)を考え、次に山(生駒山地・金剛山地)を考えると、このことを続けてきた。<sup>29)</sup> しかし、旧河内平野がその東西を生駒山と上町半島(上町台地)に、南北を羽曳野丘陵と旧淀川に囲まれた土地である以上、「日、出ずる山」としての生駒山はもちろんのこと、海を背にして「日、没する山(丘)」である上町台地や、淀川を越えて北風を送ってくる北摂山地、そして、王陵の地である南の羽曳野丘陵などを複合的さらには相互交渉的に考えてゆく必要があるということ、近年ますます強く感じるに至っている。

河内平野から見た「日、出ずる山」としての生駒山は、奈良盆地から見れば「日、没する山」であり、その両義的・二面神的なあり方が、この山塊に際立った祭祀的・宗教的陰影を与えている<sup>(30)</sup>。そして、河内平野にとつては上町台地が「日、没する山」の役割を引き受けてきたのだが、そこには、おのずから限定要件も発生した。それらの風土を全体として把握することで、この地を選んだ人たちがおり、さらに古大和川を遡行して大和盆地に生活の拠点を移した人たちがいたという選択に、より自然に得心が行くものと考えている。

ただし、この平野（河畔の自然堤防と後背湿地から成る微高地と低平地の複合体）に生きた人々の生活を根本的に支えていたのは、やはりまず第一に川であった。たとえば、一般向けの解説書であるが、『考古展 河内平野を掘る』<sup>(31)</sup>などを読めば、その思いはさらに強くなる。先ほどの「銅鐸飾耳片」に絡めて言えば、縄文時代に関しては、遺物が川に流された（「流入」と呼ぶ）可能性も高く、とりわけ平野部では縄文前期の姿を探ることは難しいが、縄文後期から晩期にかけて、すなわち河内潟の時代に対しては多くの発掘成果が重ねられている（『河内平野を掘る』一〇八―一〇九頁）。このような事情は、かつての大和盆地にも（大和湾から盆地へと変遷した）適応が可能なのではないだろうか。

すでに河内湾の時代（縄文前期から中期。約五〇〇〇～三〇〇〇年前）、さらにそれ以前の旧石器時代から、生駒西麓に生活の痕跡が残る事実が知られてきた<sup>(32)</sup>。縄文時代にも日下貝塚・縄手遺跡といった標高一五～二五メートルの扇状地末端部で、縄文人が生活していたことが明らかになっている。それどころか、長原遺跡や瓜破遺跡（平野区）では、旧石器時代の出土品によって、一九七〇年代に「（長原のような）引用者注）低い沖積地上にあっても旧石器時代遺跡の存在することが推定された」（一〇〇頁）のである。長原遺跡は、現在の（新）大和川の右岸（北岸）にあり、ここは大和川付替え（新大和川開鑿）以前にあつては、河泉丘陵の一角をなす羽曳野丘陵の北辺を北へと下った場所と呼ぶことができる。ここから河内平野では最初に旧石器時代の尖頭器や石核が出土した際、発掘に当たった研究者が「大和川を越えればすぐ羽曳野丘陵だということで、この辺りにまで狩をしにきてたのかなと考えた」（二〇七頁）のも、当時の研究水準から考えれば無理はなく、むしろ自然な考察だったというべきであろう。

西田陽一氏（『河内平野を掘る』）によれば、河内平野からは、一九八一年までに六ヶ所で旧石器時代の遺物が発掘され、遺跡が確認されている。発掘の順に列記すれば、以下の通りである。

- ① 長原遺跡Ⅰ（地表下約五〇cm）サヌカイト製舟底型尖頭器

- ② 同 II (地表下約一・五m) 切出ナイフ型石器一、二次加工のある剥片一、石核三、その他剥片約一四〇(石器製作区であるか。周辺に居住区の存在も推定されている。)
- ③ 八尾南遺跡 サヌカイト片(後期旧石器時代)
- ④ 長吉川辺遺跡 削器
- ⑤ 瓜破遺跡 国府型ナイフ形石器
- ⑥ 長吉野山遺跡 サヌカイト欠片(存疑)

長原遺跡Ⅰの標高が約一〇メートル、他もほぼ同程度の低地(微高地)である。これらの成果によって「河内平野の厚い沖積層の下にも旧石器時代の遺跡や遺物の包含されているらしいことが、かなりの高い蓋然性をもって語れる段階に達した」(同前、一〇六頁)。周知の通り、近畿一円でサヌカイトを産するのは二上山北部山麓であり、後期旧石器時代から弥生時代までの遺跡が検出されている。<sup>35)</sup>ただし上記のサヌカイトが二上山(金剛山地北端)由来のものであることは検証されておらず、八尾南遺跡の出土品からは、むしろ瀬戸内海地域との結びつきが指摘されている。<sup>36)</sup>

#### 4、玉造りの人々

##### (1) 海彼からの影響

大和川の上流域という意味でも、幾本もの河川が交錯した「八尾」という地名に象徴される、まさに「河内」と呼ぶべき地形につくられた「まち」<sup>37)</sup>という意味でも、纏向や唐古・鍵遺跡は河内を考えるための大きな示唆を内包している。水路の存在と整備の様子からは、河内と同様に、朝鮮半島を中心とする「外国」<sup>38)</sup>との交通・交易の存在を想起させられる。その折のコミュニケーション、つまり「言語」は、「内」と「外」を明確に意識する大きな要素になったと考えられるが、半島や大陸の言語を話す人は纏向にも相当数いたはずである。<sup>39)</sup>

たとえば上田正昭氏は、纏向遺跡の東西軸について(『邪馬台国と纏向遺跡』二〇―二二頁)、中国の南北軸に対する独自の要素として注目

された。上田氏は首里城の例を挙げて、「明の紫禁城に向かっている。だから西向きにしている」と述べる。すなわち、ひとつは中華（漢字）文化圏の辺境国同士の交易の在り方であり、一方では文化的影響関係の問題である。移入した「外」の文化を、「内」の論理にもとづいて、どのように即自化してゆくかというダイナミズムを示唆する一例であろう。<sup>④</sup>『邪馬台国と纏向遺跡』二五頁以降の橋本輝彦氏の報告を読めば、図8（四七頁）や図14（五二頁）に明らかのように、上田氏のいう「東西軸」が存在する事実は決定的と思われる。少なくとも、三世紀前半における日本最大級の建築物が東面して建てられたという事実は相当重要であろう。また、その前後（東と西）に中心軸を同一とした幾つかの（現状では三つの）やや小さな、しかし、当時の一般的な住居に比べればずっと大きい建築物が一直線に（すなわち東西軸上に）並んでいることも注目される。黒田龍二氏も「軸線の存在には中国の影響が考えられる」（八五頁）としつつ、「中国では軸は南北軸、建物は土間床である。纏向で東西軸が採用され、高床式建物が主体になっていることが中国文化を知った上でのことであるならば、ここにはすでに独自の高度な文化が存在したことになる」（同前）と述べている。橋本氏は中国大陸から持ち込まれた可能性のある土器の存在を指摘している。大陸から直接ではなくとも、朝鮮半島を経由して中国文化が入って来ていた可能性は低くない。

しかし、その一方で中国からの影響とはまた別に、太陽の運行に従う東西軸への関心、むしろ信仰としての執着が三世紀の大和盆地、とりわけその東側の初瀬川（大和川上流）流域に定着していたことが想像される。そしてそのことが、この頃の日本列島では他に見られないほど大型建築物を建てるだけの力を持った人、もしくは人々の行動原理としてはたらいっていた事情が想像されるのである。<sup>⑤</sup>

## (2) 「玉造」（河内玉造）について

古代以前の河内を考えるうえで再び生駒西麓に目を移すならば、八尾市の恩智遺跡には旧石器時代以来の居住の形跡が残る。そして、弥生時代の地層からは恩智安養寺の裏山より流水紋銅鐸と袈裟襷紋銅鐸が検出される。<sup>⑥</sup>八尾東南域の住居地が東北域へとひろがった結果と考えてよいだろう。それは同時に、山腹から山麓へと祭祀場を包摂する居住域が移動したことを意味するはずである。

玉造遺跡は、現在の高安地区（八尾市東南部）に立地する。玉櫛（串）川の右岸すなわち東岸と恩智川西岸の間にひろがる地域である。「玉造」という遺跡名称に残るように、ここでは宝玉の加工がなされ、現代にまで続くこの地域の製造業（モノづくり）の端緒とも考えられる。石器や土器といった生活用品（少なくともその要素を含む）とは異なる、威信材という意味でも装身具という意味でも、明らかに余剰生産力にもとづく産物でありアクセサリーである。そして、玉櫛（串）川の流域に当たるこの地での「玉づくり」と「玉櫛」という名の由来となった「玉

(珠)との間には、何らかの関連性が認められうる。さらに、大和川水系(河内側)の分岐の始点となるこの地域の「玉造」と、河内平野を流れた旧大和川水系が上町台地の北側で再び合流する地点付近にある「玉造」(現在は大阪市中央区・天王寺区・東成区の三区にまたがる)との関連が想定される。<sup>(44)</sup>

難波(撰津)側の玉造は平野川沿いにある。高安地区からは、玉櫛川・恩智川のいずれかを経て難波堀江まで水路を進み、一キロほど陸路を南下するか、高安からそのまま二キロほど南下して二俣から平野川に入り、玉造の手前(東)で上陸するという経路が考えられる。移動のみならず運搬も容易、控えめに言っても十分に可能であった。<sup>(45)</sup>

以上を合わせて、彼らは旧石器時代以来、大和川の水運を握る要地という立地のアドバンテージを掌握してきた。「河内玉造」への居住もさることながら、現在は「撰津玉造」の陰に隠れて取り上げられることもほとんどない、この「河内玉造」こそが、のちに至るまでこの地域にモノづくりによる繁栄をもたらす先駆的な要因であった可能性を考えておきたい。

## 5、玉と櫛について

### (1) 玉櫛明神

ここで、「玉櫛明神」とも呼ばれてきた津原神社について確認しておく。<sup>(46)</sup> 同社は、『延喜式』神名帳に載る、いわゆる式内社であり、東大阪市花園本町に立地する。右に述べた河内玉造(八尾市高安地区)の下流に当たる。祭神は、主神が天児屋根命・天玉櫛彦之命・天櫛玉命の三柱。撰社に白峰・一葉・八幡・稲荷二社の五社が、末社に若宮・水神社などが在る。かつては河内湖へ向かう旧大和川(玉櫛川)の船着場付近に鎮座し、次第に近隣に市場が立ち市場村と呼ばれるに至った。天平勝宝六(七五四)年に風水害甚しき折、旭神社の撰社である平野可美村若宮八幡宮の祝部への神託に、上流より橘の枝と櫛箭(櫛を入れた箱)を流し、櫛箭の留まった所に神を祀ると水難は自ら収まるであろう、と。そこで大和川の上流(大和と河内の国境)から櫛箭を流すと当地に留まったのだという。そして、橘の枝が留まった場所に建立されたのが若宮八幡宮であったという。<sup>(47)</sup> 櫛箭の留まったのが、この地であることは動かないとして、同時に流したのが橘であれば、じつに多くの含意に満ちている。ただし、主眼は櫛箭であったと思われ、櫛箭の留まった地へと流れる川の名が玉櫛川であるのに対して、橘は川の名はおろか、

地名にすら残っていない。おそらく本来は、「玉櫛」という地名の起源説話に近いものとして語り出されたのではなかったか。<sup>(48)</sup>

櫛が、髪という（神ともつながる）霊力の宿る場所を「梳く」ものであり、それ自身が霊的な物体でもあることにもとづけば、神意の卜定に用いられるのは十分に理由のあることだった。縄文時代以来、副葬品として玉（宝玉）が副えられることは周知だが、櫛もまた副えられる場合がある。死後の装身具であるとともに、避邪の意味が込められていたと考えられる。櫛は、神話体系の中でも繰り返し特別な「モノ」として登場しており、津原神社の縁起に登場してくるのも、その霊性との関わりを押しさえておく必要があるだろう。ただ、その折に流されたのが櫛筒だけではないこと、櫛筒に比してもうひとつのモノの正体が明確ではないことなどの疑問が残る。<sup>(50)</sup>

ここには、おそらくスサノヲ伝承（『古事記』）が反映しているだろう。上流から箸が流れてきて、スサノヲは上流に人家のあることを知ったのであり、倒したのはヲロチである。これが龍にせよ蛇にせよ、「水をつかさどる」ということには間違いなく、いわば（スサノヲが自然の威力を象徴する人格であったように）ヤマタノヲロチ（八岐大蛇）とは暴れる川の象徴であった。<sup>(51)</sup>そして、そうであれば「八岐」とは数多くに分岐する川の姿を表わした名辞であった。玉が鉾物由来のモノであるのに対して、箸や櫛はいずれも基本的に木製品であり、日常的な衣食に用いる生活用品である。一方は「食」、一方は「衣」（むしろ身だしなみ）に関わるものであるが、共通する要素が多い。私の知る限り、「川を流れる日用品」というプロットは、あまり多くの神話や説話に見られるものではない。日本神話では八岐大蛇説話のほかに、三輪山の大物主伝承の丹塗矢または箸墓伝承の箸の事例（『日本書紀』）を知るのみであり、前者の場合は生活用品ではなく武具または装飾品である。ただし、「川（水）に流す」という行為へと視点を移すと、そこには避邪・禊祓を目的とするさまざまな浄化儀礼が浮上する。海神の生け贄となったオトタチバナヒメの櫛が海辺に流れ着く糸りや、神功皇后三韓（新羅）征伐の際に多くの箸やヒラデ（平たい食器）を浮かべた「箸浮かべ」（『古事記』）なども、その範疇に収まるだろう。<sup>(52)</sup>

一方、櫛で思い出すのは、竹の櫛を投げると筍（タケノコ）に変じたという『古事記』のプロットである。また、追いかけてくるヨモツシコメに向かって投げるアイテムのひとつとして、蔓草の髪飾りなどと並んで用いられた。それらは、霊威の象徴であり、他の大きな「力」を防ぐモノ（物神）でもあり、「柵」のメタファーでもあっただろう。また、強大な「力」を顕わにする相手に対して、頭腦的な（悪く言えば小賢しい）技で対抗しようとする「智」の象徴と呼ぶこともできるかもしれない。そのような前提の上に、神功皇后の「櫛浮かべ」なども考慮に入れつつ「暴れ川に櫛を流す」という行為（神事・卜占）を考えてみる必要もあるだろう。たとえば、『日本書紀』巻第十一、仁徳天皇十一年の人柱譚である。茨田堤（河内国茨田郡）を築くに当たり、武蔵国の強頸と河内国の茨田連杉子が人柱にされようとした折、杉子が機

転を利かせ、匏(瓢)を浮かべて逃れるという話である(ヒサゴは神功の「箸浮かべ」にも描かれる)。また、南方熊楠が『南方閑話』(坂本書店、一九二六年)に言及して以来、人口に膾炙する長柄の人柱伝説であり、いずれも河内と関わる。

「櫛笥を流す」という伝承(縁起)が、いつからのものであるかが全く分からない現状では、『古事記』や『日本書紀』との関わりも曖昧だが、平野の若宮八幡宮にその縁起が伝わったことは重要であり、津原神社と若宮八幡宮との関わりの中からその理由を探り出すことが試みられてよい。本稿冒頭の記述に戻れば、価値の高いもの(貴重なもの)を川に流すという行為が、この場合には「神社(鎮守)の建立」という重要な使命を帯びていたことを物語っている。そして、そこには先ず、圧倒的な河川への畏怖が存在しただろう。

## (2) 櫛玉饒速日命

神武東征神話の中に登場し、生駒西麓で神武軍を撃退する長髓彦(登美能那賀須泥毘古)の逸話は、史実の上でこの地を合戦の舞台とせしめた物部守屋へと、饒速日命(『日本書紀』)という一柱の神を介して結ばれる。その詳細については別に考察することとして、ここで触れておきたいのは、『先代旧事本紀』によれば物部氏の始祖が「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊」または「櫛玉饒速日尊」、さらには「櫛玉命」(『伊勢国風土記』逸文)などと表記されていることである。

物部氏の根拠地である弓削郷を潤して流れる川の名が玉櫛川であることは見逃せない。まして、弓削からやや北に当たる一帯(玉櫛川の川下)が玉櫛と名づけられていたことは重要である。玉櫛を通ってほぼ北へと流れるこの川が、Y字型に北東・北西へと二方向に分岐する(東を吉田川、西を菱江川と呼ぶ)手前で、河内平野の旧大和川水系を形成する河川の御多分に漏れず、大変な暴れ川として繰り返し洪水を惹き起こした玉櫛川の鎮めとして建立されたのが、津原神社(玉櫛明神)であった。その縁起(若宮八幡宮蔵)にいわく。この川を鎮めるために神社創建の地を下して、上流から櫛笥と櫛の枝を流したところ、櫛笥がこの場所に流れ着いて留まったため、ここを建立地にしたとは、すでに述べたところである。

ニギハヤヒノミコトを祖神とする物部氏の本拠は、津原神社(玉櫛明神)よりは、いささか上流(南)に当たる。既述の通り、津原神社の祭神は主神が天児屋根命、天玉櫛彦之命、天櫛玉命の三柱であり、饒速日命は祭神ではない。しかし、物部系の石切劔矢神社と同じ天児屋根命が祭神(主神)であり、天玉櫛彦之命、天櫛玉命という二柱が櫛玉饒速日命との深い関わりを思わせる神々であることから、ニギハヤヒと全く無縁であるとも言えない。



「玉串・宝持」エリアは、「国の境」でこそないけれども、長瀬川（久宝寺川）と玉櫛川によって形成される「境界」であった。その地名に残る玉串（本来は玉櫛）は、そのすぐ北で大きく菱江川と吉田川に分岐する。そのように幾重もの意味で、この地は当時の言葉による「旁示（傍示）」すなわち境界であった。<sup>(36)</sup>ここで再度思い返すべきは、「櫛（櫛笥）」と共に玉櫛明神（津原神社）創設の縁起に登場した「櫛」である。流された（神意を下すために用いられた）櫛は、玉櫛庄に関わりが深く、本姓として櫛氏を名乗る楠木氏においては語れない。<sup>(37)</sup>私は、この地域における「櫛」kusiというものは、どこかで「楠」kusuと通底しているのではないかと考えている。すなわち「玉櫛」という地名の中に「楠木」が織り込まれている可能性である。それは、「櫛」という楠木一族の別称を介して、玉櫛伝承ともつながっているはずである。<sup>(38)</sup>

以上、三世紀を中心に据えて論ずる拙論の末尾に、およそ千年後までの事象を述べたのは、そこには千年前の人びととつながる人間の姿が見いだせるからである。この千年の間を埋めてゆく作業が、今後の課題と考えている。

## 6、おわりに——今後の展望

任車権氏『日本の中の百済文化』<sup>(39)</sup>は、四世紀以降の百済人の「渡日」について記す。とりわけ、六六〇年の百済滅亡に際して多数の渡来があったことは、つとによく知られている通りである。『日本書紀』に記す久氏（クテイ）の来朝の頃から七世紀に至るまで、「渡日」は朝鮮半島との間に固い交流の基盤が存した結果として行なわれたことであった。それは、まさに任氏が「日本とは交流が頻繁で、皇室にも百済人が相当に入り込み、近親関係を保っていたので」と記す通りである。また、『日本書紀』の天智四、五、八年（六六五～六六九年）に千百人余を近江国へ、二千人余を東国へ「遷居」させるといった移民の配分は、これ以前からも実績があり、これ以後も波状的に続いたと考えられる。その結果、『新撰姓氏録』に見るような半島系移民の日本列島各地への展開と浸透があったと考えられるのである。<sup>(40)</sup>

その点でも問題となるのは、彼らの痕跡である。「喜連」が「クレ（伎人）」の郷であったとして、河内湾の周囲をぐるりと取り囲むように定着した渡来人（渡来系民族）の集落の中で、なぜ「喜連」が「伎人」（久礼・呉）と、おそらく定着民の出身地の言葉で呼ばれ続けたのかということである。そこから敷衍しても、当時の言葉を用いた、彼らの出身地に関わる地名は少なくともなかったものと考えられる。

そして、その痕跡は河内にこそ多く残っている。たとえば、これまで知られている「巨摩（コマ）の杜（巨摩堂）」以外にも、生駒の東に

もある「鬼虎(キトラ)」であり、「瓜生堂(ウリウド)」である。いずれも中河内(現・東大阪市)の地名であるが、すでに知られる大阪市内の「瓜破(ウリワリ)」や「遠里小野(ウリウノ)」などとともに、古代朝鮮語由来の地名であると考えられる。ほかならぬ「ナラ(奈良・寧楽)」が朝鮮語で「国」を意味し、明日香村栗原が本来は「呉原」であり、などといった事例を積み重ねてゆけば、郡(コ・ウリ)へと発展するムラの地名などが朝鮮語由来の日本語として成立した可能性は十分にある。むしろ日本語(の表記)そのものが、本来は外来語によって成り立っているのだから、逆にそのこと(外国語の影響)を取り出してみ考える必要はないのかもしれない。とりわけひとつの言語(の痕跡)を抽出するのは、どこまで意味のあることを常に考える必要がある。

本稿では、大和とのつながりに主眼を置きつつ、古代以前の河内を、「モノ」との関わりを主眼として考察した。大和に定住した人々が、渡来人と呼ばれる人たちの文化を大きく取り入れて朝廷と呼ばれる権力組織の中枢にまでたどり着いたことは疑いえないが、そこまでの経緯については未だ知りえぬ要素が多分にある。また、たとえば円形への嗜好(の可能性)は大陸や半島と日本列島を結びうるのか。本稿で垣間見た通り、列島の一地域においても、それは必ずしも一定せず、揺れていた。本稿では、あえて統一的にそのことに注目し続けることはせず、また議論の拡散をおそれ「鉄」と「馬」にはあえて目をつぶって旧大和川の上流(大和)と下流(河内)を観察してきたが、今後は「人」が持ち運ぶ「モノ」から「文化」が生まれ、社会の遷移をもたらす具体相に注目して論じて行きたい。もちろん、河内の古代を考察するためには、日本列島以外とりわけ周辺アジア地域の動向にも(こそ)目を凝らす必要がある。本稿では、4(1)「海彼からの影響」に述べたところであるが、これでは全く不足している。すべからく続稿を期したい。

#### 【付記】

本稿は、平成二九・三〇年度大阪商業大学アミューズメント産業研究所研究プロジェクト「東大阪市の文化力(カルチュラル・パワー)に関する歴史地理的研究」(研究代表者：石上敏)による成果の一部である。なお、『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第18号(二〇一六年六月)掲載の拙稿「生駒山の位相―アミューズメントエリア形成の前提として―」では本稿と重なる時代の河内を考察している。併せてお読みいただければ幸いである。

また、本稿は平成二六・二七年度大阪商業大学比較地域研究所研究プロジェクト(研究課題「アジアにおける企業群像の抽出と企業家ネットワークによる経済統合の深化に関する研究」、研究代表者：坂田幹男教授)による研究成果の一部でもある。東大阪(中河内)地域にお

る製造業（モノづくり）産業集積の背景を、古代以前にまで遡って検討する筆者の試みは未だ緒に就いたばかりであり、本稿ではその外延を論じたにすぎないのだが、この観点から見た主要な事項のいくつかに触れることができた。研究遂行時、そして遂行後を通じて、研究代表者の坂田幹男先生、比較地域研究所長の前田啓一先生には、種々お手を煩わせた。この場を借りて御礼申し上げたい。

私は、大阪商業大学開講科目「河内の伝統と風土」（旧「地域と文学」）を二十四年間担当するなかで河内の歴史に目を開かれてきた。また、大阪商業大学商業史博物館内に事務局を置く「河内の郷土文化サークルセンター」に所属するサークルの方々との交流を中心に、地域史や地域文化に関する多くの学びを重ねてくることができた。本稿では、特に上記両研究プロジェクトにおいて、飛田太一郎氏をはじめとする地域史家の方々からのご教示、関係課室の皆様のご尽力を忝くしたことを記して、深謝申し上げる。なお、住居に関する考察は、大学院地域政策学研究所・崔文彬さん（地域経済政策専攻・博士前期課程二〇一八年三月修了）の修士論文指導の副産物でもある。資料整理に協力してもらった本学卒業生・藤本貴司、在学生・石谷智哉の両君共々、謝意を記しておきたい。

## 注

- (1) 拙稿「河内論序説―その地勢・風土と精神世界―」（『大阪商業大学論集』第二巻第四号、通号一四四号、二〇〇七年二月）。この地域（中河内）には古墳が存在しないと思われている。あるいは、ほとんど意識されることがない。ただし中河内にも古墳はあり、中でも有名なものひとつに瓢箪山古墳がある。そこには瓢箪山稲荷が現在でも鎮座し、近世（江戸時代）には日本各地の稲荷のみならず、寺社地全体の中でも有数の殷賑を示していたという。そのような後代との関連を述べるのは本稿の任ではないが、河内の古墳時代といえは南河内の巨大古墳群と河内王朝のみが脚光を浴びる現在の傾向に、いささかの疑問を感じていることを記しておく。従来の研究と論考は、あまりに「古墳のある地域」に集中しすぎている（その傾向は、古墳群の世界遺産登録によって助長されつつある）。古墳時代において、「古墳のない地域」にも人々は暮らしていたし、その人々も身近な人が亡くなれば「墓」をつくり、葬送し、祈りを捧げて暮らしていたはずである。
- (2) 井上章一『角川選書 日本に古代はあったのか』（角川書店、二〇〇八年）。
- (3) ただし、弥生時代の始まり（縄文時代との境界）は、近年の発掘成果によって大きく動いていること、周知の通りである。
- (4) 中河内の一角を占める現在の東大阪市は、同じく中河内の八尾市と並び、製造業に従事する中小企業の日本を代表する集積地として知られている。そこで製造業全般を示す「モノづくり」という表記に従う。

(5) 河内の地域と風土に関しては、注(1)の拙稿「河内論序説」に論じた。本稿は、それ以後「河内の通過者」(『大阪商業大学論集』第九巻第二号、通号一七〇号、二〇一三年七月)、「河内の近世」(同 第一〇巻第二号、通号一七四号、二〇一四年七月)、「河内と能」(同 第一二巻第四号、通号一八四号、二〇一七年二月)、「河内の古代」(同 第一三巻第四号、通号一八八号、二〇一八年二月)と、古代から近世に至る各時代の河内を論じた一連の拙論(いずれも副題は省略)へと連接するものである。

(6) 河内の八尾とは、旧大和川の川筋にあつて複数の河川が鳥趾状に流れていることから名づけられた地名であることを証明したいと、私はかねがね考えていた。大和の八尾は、そのような所説を支えるのに、まさにうつつけの場所である。唐古・鍵遺跡の特徴として、石器から木製品・青銅器に至るまでの製作地と推定されることや、洪水による埋没から繰り返し再建がなされていることなどがある。また、この大和の八尾から移動してきた人たちが河内の八尾に住み着いたという説も存在する。なお、後代の奈良盆地と区別するため、古代以前のそれを大和盆地と表記する。

(7) 『ヤマト王権はいかにして始まったか』(学生社、二〇一一年五月刊)、及び『邪馬台国と纏向遺跡』(同、二〇一一年八月刊)は、前者が弥生時代中期後半から後期弥生時代、すなわち一〜二世紀から三世紀にかけて、後者が邪馬台国の時代に当たたる三世紀に焦点を当てて、いずれも一〜三世紀頃に大和川の上流で起きていたことを改めて認識させる内容であった。

(8) 本文中に言及する引用文献のページ数は、引用文のあとに( )に括弧で示すこととする。以下同様。

(9) 以下の考察は、注(1)の拙稿「河内論序説」および「河内イメージの形成と展開」(河内の郷土文化サークルセンター編、水野正好監修『河内文化のおもちゃ箱』批評社、二〇〇九年)の中で論じた河内の古代以前を再考し、拡充したものである。本稿では、河川との関わりについて述べる紙幅の余裕がないので、その詳細は、注(5)の拙稿「河内の古代―千歳を待ちて澄める河」の解釈を中心に<sup>1)</sup>に譲りたい。

(10) 石田博信編『纏向』(桜井市教育委員会刊、一九七六年)。また、同氏著『邪馬台国時代の王国群と纏向王宮』(新泉社、二〇一九年)を参照。

(11) この頃、この地域に居住した人々が「円」という形態に対して特別な思い入れを持っていたことは無視できないが、古墳時代の末期に至れば方墳の存在が注目される。円形と方形の融合が前方後円墳に残存しているあいだに居住空間からは円形が駆逐され、ついに古墳にも方形のみが採用されるという経緯を描くことができるからである。しかし、これを単純に形状への嗜好の変化ととらえてよいものかどうか。たとえば古墳出現以前、河内では方形周溝墓が造営されていた。ところが河内平野の長原遺跡(現・大阪市平野区)では弥生時代終末期から古墳時代初頭、円形周溝墓と方形周溝墓が混在し、「同じ墓域の中で円形周溝墓と方形周溝墓がそれぞれに群をなしながら築かれたようです」との報告がなされており、『長原遺跡(N G 03―6次)発掘調査現地説明会資料 大阪市平野区長吉長原1丁目「長原東住宅敷地」二〇〇四年一月、大阪市教育委員会・大阪市文化財

協会）包括的な解釈を拒んでいる。

- (12) ただし、時代を下ると前方部に埋葬がなされる事例が報告されている。古墳の形態の変遷については注(7)『邪馬台国と纏向遺跡』などを参照した。

- (13) すでに縄文中期から高床式倉庫が出現している（太田博太郎監修『カラー版日本建築様式史』美術出版、一九九九年など）一方で、竪穴式住居は縄文時代前期に楕円形とともに存在した方形が、中期に後退し、後期に至って再度出現するという経緯をたどる。弥生時代は円形が主流であるが、中期から後期にかけて隅丸方形・隅丸長方形が出現している。すなわち、時代や地域によってさまざまな傾向を見せる。現代に至っても、私たちは住文化において「円」を採らず「方」を採用しているが、実際には、ほとんど意識すらなく選択している。古代以前の住居形態に当時の人々がどれだけ自覚的・意識的であったか、そのことを明確に考証した研究を知らない。

- (14) 弥生時代中期から後期にかけての東日本の遺跡では、竪穴式住居は隅丸方形か隅丸長方形で、このような住居は関東や中部地方以北では平安時代まで続くが、鎌倉時代以降は関東に竪穴状遺構の名残りを残しつつ全面的に消失する。一方、近畿では飛鳥時代から掘立柱建物に移行するという（石野博信『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館、一九九〇年）。なお、方墳と前方後方墳との関わりについては、和田晴吾「前方後円墳とは何か」『シリーズ古代史をひらく 前方後円墳 巨大古墳はなぜ造られたか』岩波書店、二〇一九年）など参照。

- (15) 縄文前期に、すでに東日本と西日本との間に対峙的な文化圏が成立していたという見方がある（岡村道雄『縄文の列島文化』山川出版社、二〇一八年）。それは縄文早期以降の安定的な定住生活によるとされ、岡村氏は、後期旧石器時代後半にはすでに石器文化における地域文化圏が出現していた可能性に触れている。

- (16) 巨大化に見合った見返りがなかったというコストパフォーマンスの問題以外にも、埋葬の意味や祭祀形態が大きく変わった可能性もあり、地域ごとの部族や支配者の交替という可能性などが考えられる。前方後円墳に関する最新の成果と呼ぶべき注(14)の『前方後円墳』（吉村武彦・吉川真司・川尻秋生共編）に多くの示唆が含まれている。

- (17) 桜井市纏向学研究中心編『纏向学研究』第二号（二〇一四年）所載「突線鈕式銅鐸破碎プロセスの金属工学的検討とその考古学的意義」で、福永伸哉・近藤勝義両氏は「破片銅鐸がほぼ近畿式に限られることについては、従来から突線鈕式段階の銅鐸分布が薄いと見られていた畿内中心部（大和、河内）でさかんに破碎された近畿式の破片銅鐸が、素材・威信財などとして各地に流通した結果である可能性」（論文要旨）を指摘している。私は銅鐸の廃棄について、ひとつの可能性として音の不調・不具合を考える。銅鐸の役割については諸説あったが、特に大型化する以前の前期（小型）

銅鐸は「叩くもの(音色を奏でるもの)」という解釈が優勢となった。そうであれば、その音色に銅鐸の存廢がかかる(祭具としての優劣が発生する)という要素が考えられる。後期(大型)銅鐸は「見るもの」という解釈が優勢だが、『続日本紀』和銅六(七二二)年の条には、銅鐸の「音」が「呂律に協<sup>かな</sup>へ」た(音律・音階が正しい)ゆえに所蔵したという記事が載り(谷川健一『青銅の神の足跡』小学館、一九九五年参照)、大型銅鐸の「叩くもの」としての用途を排除できない。

(18) 再生思想によるものか、単なる再利用か、さらにいえば決定的な(跡を残さない)滅却という可能性もある。「モノの葬送」とは熟さない言葉かもしれないが、たとえば堅穴住居の多くは土屋根が焼け落ちたままの状態で発掘されるといい、注(15)の『縄文の列島文化』で岡本道雄氏は、主人が死去すると家を燃やして共に送るアイヌの「家焼き儀式」(カスオマンテ)につながると述べている。一旦供えた供物を戴く、すなわち供物にも神威が宿ると見做す「直会<sup>なほらひ</sup>」のような儀礼も注目される。

(19) 銅鐸の他に、平原遺跡や桜井茶臼山古墳に代表される銅鏡の破碎事例も多数報告されている。銅鐸破壊の始まる二世紀末以降に古墳の築造が始まることから、祭祀形態の遷移を唱える説がある。ただ、弥生時代以来の墳丘墓は明らかに古墳の前段階として無視できず、破碎されない銅鏡も多い。黒塚古墳のように多数の銅鏡の中で一枚のみ破損した事例などもあって、包括的な推論を拒んでいる。

(20) 当時における河川の意味、たとえば彼らにとつての「大河」や「小川」などという認識を知るためには八世紀の記紀・万葉を待たざるを得ない。その一端を、注(5)・(9)の「河内の古代―千歳を待ちて澄める河」の解釈を中心に―にて論じた。

(21) 奈良県香芝市二上山博物館編『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』(学生社、二〇一一年)参照。

(22) 最も近い場所を含めても、阿倍野筋遺跡すなわち上町半島の東南隅と、平野部における帰化人の居住地である瓜破北遺跡の二つがある程度である。

(23) それぞれの「一例」の中には、一〇四点(五点未滿)という幅を持つ出土点数が含まれることを付言しておく。

(24) 改めて記すまでもなく、奈良盆地を流れるほとんどすべての川は、河内平野の大和川の主流である。言い換えれば、奈良盆地のほぼすべての河川が合流し、大和と河内の国境にある亀ノ瀬(北の生駒山系と、南の金剛・葛城山系との間に位置する最低(底)部。『万葉集』では「畏<sup>かしこ</sup>の坂」)を越えて(歴史的にいえば削って)河内へと流れ至り、旧大和川(主流は長瀬川・玉櫛川)として河内平野を北流し、上町台地先端部の北で淀川と合流して大阪湾へと注いでいた。なお、河内平野の旧河道がほぼ確定して以降を「旧大和川」と呼んで区別する。ちなみに、五世紀に至っても土器等の生活用具の出土分布は、三世紀の讃岐・阿波系土器の分布とよく似た傾向を示している。

(25) 注(21)の『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』参照。

- (26) 梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』（青木書店、一九八六年）など参照。
- (27) 『日本書紀』推古十六年（七〇七年）。岸俊男「古道の歴史」（坪井清足・岸俊男編『古代の日本5近畿』角川書店、一九七〇年）参照。
- (28) 注(21)・(25)の『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』は、その代表的な成果である。
- (29) 注(1)・(5)の拙稿「河内論序説―その地勢・風土と精神世界―」以下を参照。
- (30) 拙稿「生駒山の位相（トポロジー）―アミューズメントエリア形成の前提として―」（『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第18号、二〇一六年）参照。
- (31) 河内から大和へ移動した人々が大和朝廷を建てたと象徴的（神話的）に語っているのが神武東征神話の結末である可能性について付言しておく。
- (32) 『考古展 河内平野を掘る―近畿自動車道関連遺跡の発掘成果を中心として』（大阪文化財センター、一九八一年）参照。
- (33) 東大阪・八尾・柏原などの各市史をはじめ、郷土史や調査報告書などを参照。
- (34) 注(26)の『大阪平野のおいたち』ほか参照。なお、河内平野の沖積層については、同書付載の梶山・市原作成「大阪平野の沖積層基底深線図」に基づく。
- (35) この時代の人々の移動や交易を示すのに、かつては黒曜石とともにその役割を一手に引き受けていた感のあるサヌカイト（讃岐岩）の名は、ナウマン象の名で知られるドイツ地質学者ナウマンが本国に持ち帰った石を、バインシエンクが名づけたものといい、瀬戸内海地域を中心に九州から紀伊半島にかけての産出が知られている。「馨石<sup>ウツセキ</sup>」や「カンカン石」の異名通り、叩くと澄んだ音がする稀有の石材であり、楽器としても注目される。
- (36) 『八尾南遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告47』（一九九五年）による。
- (37) それを「都市」と呼んでよいかどうかという点は、二〇〇八年のシンポジウムの最大の争点の一つであった。ただし、明確な結論は出されていない。注(7)の『ヤマト王権はいかにして始まったか』参照。
- (38) ただし、三世紀当時の彼らにそのような認識はあっただろうか。さらにいえば、関東や中四国・九州などの「国」と特段に区別するような「外」への意識である。かつて拙稿「〈異文化〉をめぐる断想 なぜ、この国でそれは〈見世物〉であり続けているのか―」（『地域と社会（大阪商業大学比較地域研究所紀要）』第三号、二〇〇〇年八月）で「外」への意識を論じたが、そのことを含め、稿を嗣ぎたい。
- (39) このことは、未だ文字を持たない列島人が、どのような言語行為を行っていたかということとも関わってくる。その一方で、たとえば関東や九州の人々と河内や大和の人々との間で、どれほどの言語コミュニケーションが可能であったかは判断が困難である。

- (40) この点は、ここにいりまでもなく汎アジア的な考察が必要であろう。首里城が西面することへの考察は、拙稿「末吉宮論―中世日本との関わりの中で―」(『大阪商業大学論集』第一巻第四号、通号一八〇号、二〇一五年)に些か論じた。
- (41) 全体復元図は、注(7)「邪馬台国と纏向遺跡」七五頁の黒田氏論、図2を参照。
- (42) それを権力と呼ぶべきか、財力と呼ぶべきか、他にさらに適切な呼び方があるのかはわからない。ただし、交換経済の結果として手に入れた「力」であることは間違いない。そして、時間の面からは、これを「余暇」による、もしくは資する生産物と呼んでよいだろう。
- (43) 一九八九(平成元)年一〇月、公共下水道工事に伴う跡部遺跡の発掘調査による。『新編 八尾市史 考古編1―遺跡からみた八尾の歩み―』(二〇一八年)のほか、「史跡の道」説明石板(松岡裕子書、八尾菊花ライオンズクラブ・八尾市教育委員会、一九九四年)を参照。
- (44) 「玉造」については、高安を論じる際に、河内への渡来人の定着を論ずる視点から改めて考察したい。
- (45) 高安については、高安能未来継承事業推進協議会主催「次世代へつなぐ高安能未来発信プロジェクト 連続講座『伊勢物語と能』」(河内文化をキーワードに地域文化研究者の立場から、二〇一六年二月一〇日)、「やお発 次世代へつなぐ高安能未来発信プロジェクト2017 連続講座『河内の歴史文化再考』」(河内の歴史文化を再認識するパネルディスカッション、二〇一七年九月三〇日)などで繰り返し論じてきた。別稿「高安の位相」を留意している。
- (46) 『中河内郡史』ほか参照。その由来は、津(湊)の存在に加え、玉櫛川が吉田川と斐江川に分岐する氾濫原を「津の原」と称したものと考えられる。「つばら」と呼ばれてきたが、地元では「つばら」とも称する。
- (47) 「津原神社の由緒」等参照。なぜ縁起が河内花園ではなく平野の若宮八幡宮に伝わるのかは未詳であるが、津原神社の境内社(末社)に若宮神社、摂社に八幡神社があることは注意しておきたい。ちなみに、平野については、注(40)の拙稿「末吉宮論」にて論及した。
- (48) 「玉櫛筒」という言葉は、「玉のように美しい櫛筒(櫛を入れる箱)」という意味であるが、流されたのが櫛と筒であれば話は明快である。しかし、櫛の枝と櫛筒ということになると、いささか珍しい組み合わせということになる。櫛の枝から櫛がつくられた事例は管見に入らないが、近縁種である月櫛げつきうは櫛の材料とされる(熱帯植物研究会『熱帯植物要覧』養賢堂、一九九六年など)。仮に一方が櫛であれば、文化的に對になるのは桜であろう(右近の桜、左近の櫛)。ただし、それは平安期以降のことであり、あるいは貴族文化に限定されてのことであった。記紀に載る「非時香菓」を『古事記』は櫛とするが、確証はない。日本固有の常緑樹である櫛の聖性を担保したのは、その香りであり、「五月待つ花櫛の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(『古今集』)以降は、専ら香気の回想と結びつけて詠まれた。「かぐや姫」の名に象徴されるように、視覚的な美も嗅覚的な美も「匂う(嗅ぐ)」



ものであった当代、橘と櫛は近いものとして意識されていたのかもしれない。また、このような伝承の背後には「川の民」の存在を想定する必要があるだろう。「川の民」については、軽々に論じうるのではなく、改めて考察する。網野善彦「境界に生きる人びと」（『駒澤大学仏教学部論集』

一九、一九八八年初出。『日本中世に何が起きたか』日本エディターズスクール、一九九七年。洋泉社MC新書02、二〇〇六年所収）など参照。

(49) 注(15) 岡村道雄『縄文の列島文化』参照。

(50) 梅原猛『海人と天皇―日本とは何か―』（新潮文庫、一九九五年）ほか参照。「玉櫛笥」という言葉があるように、「櫛」と「笥」は本来一對のものであった。ただし、同時に流したのが「橘」であれば、櫛笥の対が橘であった理由が探られねばならない。

(51) 八岐大蛇については、周知の通りおびただし論考が存する（たとえば肥後和男『古代伝承研究』河出書房、一九四三年。開高健『饒舌の思想』講談社、一九六六年など）。また、蛇の象徴性に關しては、吉野裕子氏の一連の論考を参照。

(52) スサノヲはクシナダヒメを櫛に変え、髪に挿してヲロチと戦う。すなわち「お守り」である。クシナダヒメの名に示されるように、「櫛」とは「奇し（美しい）」という美称と関わり合う名称であったと考えられる。ただし、単なる美しさであるとともに「力」の象徴でもあった。その「力」は、スサノヲがオホナムヂによって髪を天井に結びつけられ無力になることが示しているように「髪」に由来する。

(53) これは、ひとつには津原神社が玉櫛川の洪水を繰り返して文書が伝わらなかったことを示唆しているが、それが積極的に「避難」させたものか、あるいは何かの偶然で若宮八幡宮に伝わったものかは、わからない。実際、津原神社の本殿の背後には、今でもなお神池（神体）が残されていて、この地のかつての姿をわずかにとどめている。

(54) 物部氏の祖神である饒速日命は、『先代旧事本紀』にのみ「櫛玉饒速日命（天照国照彦天火明櫛玉饒速日命）」と表記されている。つまり「櫛玉」という名辞は『古事記』『日本書紀』には採用されていない。ただし『日本書紀』は、饒速日命と媛踏輪五十鈴媛命との間に生まれた娘が「玉櫛媛命」であり、のちに神武天皇の后となると記す。

(55) 中世には、玉櫛（之）庄と呼ばれる平等院の莊園となった（『中外抄』保延三年の条）。祖神天玉櫛彦之命が兇賊を鎮圧した功によって賜ったのが玉櫛庄の起源と伝わる。玉櫛の「玉」は、「玉川」などと同様「玉のような美しい（櫛）」を意味する、すなわち美称の「玉」と考えられる。注(54)に示した通り、神名にも多く用いられている。

(56) 「旁示（傍示）」についても、注(1)の「河内論序説」に少しく論じた。なお、「宝持」と「法事」との関わりにも注意。この辺りから生駒山にかけて、宗教性（特に仏教）に満ちた一帯が広がっている。拙稿「東大阪市論―ラグビーワールドカップが東大阪市で開催されるべき理由―」（『大阪春秋』

- 41―4、特集・東大阪とは何か、二〇一四年一〇月)、また、梅原猛『うつほ舟Ⅱ 観阿弥と正成』(角川学芸出版、二〇〇九年)参照。
- (57) 注(5)の拙稿「河内と能―中河内を中心に―」(『大阪商業大学論集』第12巻第4号(通号一八四号)、二〇一七年二月)参照。
- (58) *kef. kezu*は推定される上代(奈良時代)の音韻による。杉浦克己「奈良時代の日本語音韻・語彙・文体」(『新訂日本語の歴史』日本放送出版協会、二〇〇五年)など参照。
- (59) 任車権『日本の中の百済文化』(第一書房、二〇〇一年)。
- (60) 祭神が不明瞭であるという極めて不思議な祭事としての「七夕」と機織民との関わりは注意を要する。当初は乞巧きこう奠でんと呼ばれる中国の祭事(針仕事の上達を願う)であったというが、日本では中途から機織民を意識した女性が登場し、遅れて農耕民の象徴である男性が登場して、機織と農耕という当時の二大産業の合力によって生産性の増進が認められるという生活観を反映した「星祭」へと変貌してゆく。「天の川」という川を舞台とした物語は「川の民」の関与をうかがわせ、日本では一貫して登場し続ける機織を職掌とした女性は、同じく機織民の関与をうかがわせる。その両者が同じ一族(渡来民)であったとすれば、日本では極めて珍しい星祭への関与が秦氏によってなされたことをうかがわせるのである。また、日本では珍しい星への信仰(伝承・物語)が、河内北東端(淀川左岸Ⅱ南岸)の枚方・交野近辺(旧交野郡)にのみ例外的に色濃いのは、この氏族の住地であったことを類推させる。
- (61) 古代朝鮮語を日本の歴史・地理、とりわけ地名に適用する研究・考察は、近年地を払って消え失せたままである。それが、研究方法と結果自体の不備・不足によるものであれば問題はないが、それ以外に理由があるとすれば、疑問が残る。
- (62) たとえば、二〇一五年八月、「宮内」と記した土器片の出土で注目された纏向遺跡であったが、二〇一六年五月に至り、前方後円墳の起源である可能性のある古墳が同じく奈良県桜井市で発掘され、大きなニュースとなった。本稿に前方後円墳の成立への簡略な私案を記したが、この点はまさに予断を許さない状況にある。